

# 世紀の分岐点に立つ教会

| 年表<br>年代  | 重要な出来事                            |
|-----------|-----------------------------------|
| 1898春     | 最初の女性宣教師が任命される                    |
| 1898.9.13 | ロレンゾ・スノー、教会の第5代大管長に任命される          |
| 1899.5.17 | スノー大管長、セントジョージにおいて什分の一を強調する啓示を受ける |
| 1901.1.1  | スノー大管長、「全世界へのあいさつ文」を公布する          |
| 1901.8    | ヒーバー・J・グラント長老、日本における伝道活動を開始する     |



ロレンゾ・スノー（1814 - 1901年）  
第5代大管長

**グ**レートベースンでの安全を約束された教会員は、回復された教会はどのような問題に遭遇しようとも耐え得るだけの体力を身に付けているとの確信を持ち、来るべき20世紀に大きな期待を寄せていた。聖徒の信頼を集めていた指導者、ウィルフォード・ウッドラフの死去により、預言者の<sup>がいとう</sup>外套は、経験と霊性においてウィルフォード・ウッドラフに比肩する85歳のロレンゾ・スノーの肩にかけられた。かつて、これほどの高齢で大管長に召された人はいなかった。

## 預言者の準備

大管長に召されたときのロレンゾ・スノーは、身長167センチ、体重はわずか59キロしかなかった。ロレンゾ・スノーは、預言者ジョセフ・スミスと直接交わりがあった最後の中央幹部である。1900年11月にソルトレーク・タパナクルで行った説教の中で、スノー大管長は預言者ジョセフとの思い出を語っている。預言者の家を訪れて家族と談笑したり、時には一緒に食事をするなど、預言者ジョセフと個人的に話し合った経験を通して、預言者ジョセフが人々から大きな尊敬を集めていた誉れある、道義心の強い人物であったことを知ったと述べている。「主は、彼が神の預言者であることをわたしにはっきりとまた完全に示されました」と明言した。

スノー大管長は様々な経験の持ち主であり、それらの一つ一つが預言者の召しの準備となっている。ロレンゾは青年時代をオハイオで過ごしている。オベリン大学で教育を修めた後、学校の教師を職業とした。やがて預言者ジョセフ・スミスとの知遇を得、また姉のエライザの感化を受けて、ロレンゾがバプテスマを受けたのは1836年のことである。生涯を通じて偉大な宣教師であったスノー長老は、1837年にオハイオで最初の召しを受け、その後数年間ミズーリ、ケンタッキー、イリノイで福音を宣べ伝えた。1840年に、英国への伝道に召され、十二使徒の指示の下で働いた。十二使徒定員会に召されてからは、1849年から1851年にかけてイタリアとスイスにおける最初の伝道活動を管理した。1853年にはユタ北部のボックス・エルダー郡の入植地を管理する召しを受けた。スノー長老はヤング大管長をたたえて、その地域で最も大きな定住地をブリガムシティと名付けている。それから40年間、スノー長老は住まいをブリガムシティに置き、地域の聖徒からたいそう愛された。スノー長老は多くの消費組合事業を設立して、地域の繁栄をもたらすと同時に教会の名声を大いに高めている。

ロレンゾ・スノーが果たした最大の貢献の一つに、人はいつの日か神のようになるという教義の解説がある。彼は<sup>だい</sup>大管長として「人の偉大な行く末」というテーマで説教を行っている。青年時代に、預言者ジョセフ・スミスが神とイエス・キリストの訪れを受けたときの説教を本人から直接聞いて感銘を受けたこと、それから2年

## 時満ちる時代の教会歴史

半後に、祝福師の祝福を受け終えたジョセフ・スミス・シニアが、その場に居合わせたロレンゾに、あなたは神と同じような偉大な者になることができると言われたことを話し始めた。そしてさらに2年半後に、ロレンゾは聖文の意味について主に尋ねたときに、次の文章を書き留めるようにとの靈感を受けた。「人が現在あるがごとくに神もかつてあり、神が現在あられるごとくに人もなり得る。」「わたしはこのときほどはっきりと示されたことはかつてありませんでした」<sup>2</sup> とスノー大管長は述べた。スノー長老はジョセフ・スミスが亡くなる直前にこの教義を教えるのを聞いている。その後のスノー長老はこの教義をテーマに説教することが多かった。

### 大管長会の継承

ウィルフォード・ウッドラフは亡くなる6年ほど前に、十二使徒定員会会長であったロレンゾ・スノーに対して、教会指導者たちとの会合の後で、個人的に話したいと言った。ウッドラフ大管長は思いを込めて力強く言った。もしウッドラフ大管長がスノー会長よりも先に死ぬことがあれば、期間を置かずに、ジョージ・Q・キャンンとジョセフ・F・スミスを副管長に召して大管長会をすぐさま組織するようにというものだった。ウッドラフ大管長はこれを啓示と考えてほしいと伝えた。<sup>3</sup>

1898年にウッドラフ大管長の健康状態が悪化すると、スノー会長は毎晩のように大管長の家を訪れた。大管長が健康を取り戻すことを目的にカリフォルニアへ出発してから間もなく、スノー会長は自身が神殿長を務めているソルトレーク神殿に入った。そして、自分に教会を導く重責がかかることのないように、大管長の命を自分の命よりも延ばしていただきたい、と主に祈った。「しかし、スノー会長は主が命じられるのであれば、どのような義務であろうとも献身的に果たすことを主に約束した。」

個人的な用を足すためにスノー会長はブリガムシティーへ向かった。そして1989年9月2日、ウィルフォード・ウッドラフが亡くなったとの知らせがブリガムシティーに届いた。スノー会長はその夜のうちにソルトレーク・シティーに戻ると、再び神殿に入り、「主に心を注ぎ出した。そしてウッドラフ大管長の命を延ばしていただきたいとどれほど嘆願したかを主に訴えた。……『しかし、……あなたの御心が成りますように。……わたしは今あなたの導きと教えを頂くために、御前にわたし自身を差し出します。主よ、あなたはわたしに何をなすことをお望みかをお示ください。』」

祈りを終えたスノー会長は、祈りの答え、すなわち主からの特別な現れがあるものと考えていた。そこで、待っていた。待って、待ち続けた。しかし、何の答えも、何の声も、何の訪れも、何の現れもなかった。」スノー会長は非常に落胆して部屋を出た。神殿内の廊下を歩いていると、スノー会長は目の前の空中に世の救い主が立っておられるのを見た。主はスノー会長がウッドラフ大管長の後継者になると言われた。そして、「大管長の死に際してそれまで慣例としてきた、一定の期間を置くことはもはや必要ないこと、直ちに教会の大管長会を再組織すべきことが」<sup>4</sup> 再び指示された。

ウッドラフ大管長の葬儀を終えた翌日、使徒たちはソルトレーク神殿に集まった。選択の自由と全会一致の原則を尊重するスノー会長は、救い主と話したことについ

## 世紀の分岐点に立つ教会

では触れずに、定員会会長の座から自発的に降りること、同僚の使徒の中で指名があればその人に指導権を譲ることを告げた。スノー会長の十二使徒定員会における長年の働き、また十二使徒定員会会長として10年近く発揮してきた優れた指導力については、十二使徒のだれもが認めるところであった。そのことによって、スノー会長は同僚の使徒たちから敬愛されていた。十二使徒は靈感を受けると直ちに、ロレンゾ・スノーを定員会の会長<sup>5</sup>として支持した。しばらくして、彼らは再び大管長事務室に集まった。そこでフランシス・M・ライマン長老は、ウッドラフ大管長が、自分が亡くなったら、期間を置かずにはすぐさま大管長会を再組織するようにという指示を残していたことを伝えた。そして十二使徒会は短い間話し合った後に、ロレンゾ・スノーを教会の大管長として全会一致で支持した。

するとスノー大管長は、数日前に主から啓示を受けて、こうした手順を踏むように、またジョージ・Q・キャノンとジョセフ・F・スミスを副管長として召すようにとの指示を受けていたことを幹部の兄弟たちに話した。「わたしはこのことをだれにも、まったくだれにも話しませんでした。わたしは兄弟たちの気持ちを知りたかったのです。また、主がわたしに現してくださったと同じ霊が皆さんに下ることを確かめたかったのです。わたしは、これが正しく、主の御心になっっていることを主が皆さんに示されると確信していました。」そして、ジョージ・Q・キャノンとジョセフ・F・スミス（二人はブリガム・ヤング、ジョン・テラー、ウィルフォード・ウッドラフの副管長を務めた）は全会一致で副管長に支持され、フランクリン・D・リチャーズが十二使徒定員会会長に召された。<sup>6</sup> 1か月後にブリガムシティーステーク会長であったラドガー・クローソンが十二使徒に召されて、十二使徒定員会に生じた空席を埋めた。

### 使徒の先任順位の明確化

十二使徒定員会会長のフランクリン・D・リチャーズ長老は1899年に亡くなったが、大管長会は後任の定員会会長を召さなかった。次の先任順位にあったジョージ・Q・キャノンが大管長会の一員として働いていたからである。さて、キャノン副管長の次位にブリガム・ヤング・ジュニアとジョセフ・F・スミスのいずれが座を占めるかについて、疑問が持ち上がっていた。両者とも十二使徒定員会に召されるかなり前にブリガム・ヤングによって使徒に聖任されていたからである。<sup>7</sup> 使徒職に聖任されたのはブリガム・ヤング・ジュニアが先だったが、十二使徒定員会に入ったのはジョセフ・F・スミスの方が先だった。

1900年4月5日ソルトレーク神殿で開かれた集会において、大管長会と十二使徒会は、使徒が十二使徒定員会に加わった時点を基準として、定員会におけるその使徒の先任順位を決めることを全会一致で決定した。さらに、大管長の死亡によって大管長会が解散したとき、十二使徒定員会に籍を有する使徒が副管長を務めていた場合、その使徒は十二使徒定員会における先任順位に基づく本来の地位に戻ることが規則として定められた。<sup>8</sup> こうして、ジョセフ・F・スミスはブリガム・ヤング・ジュニアよりも先任の十二使徒となった。これは1901年に、次の会長を選任する必要が生じることになるため、重要な決定となった。

|               | 使徒に聖任    | 定員会に加入    |
|---------------|----------|-----------|
| ジョセフ・F・スミス    | 1866.7.1 | 1867.10.8 |
| ブリガム・ヤング・ジュニア | 1864.2.4 | 1868.10.9 |

ブリガム・ヤング・ジュニアが先に使徒職に聖任されたが、十二使徒定員会に加わったのはジョセフ・F・スミスが先であった。

### 教会の財政問題の解決

スノー大管長は聖任されてからわずか4日後に、教会が直面している重大な財政危機について話し合うため、大管長会と十二使徒定員会の特別集会を召集した。教会はエドマンズ・タッカー法の直接的な影響で約30万ドルの負債を抱えていた。教会はそのほかに、多妻結婚で投獄された人々の家族の生活を支援する費用、彼らの弁護士費用と裁判費用、さらに教会の裁判費用を支払わなければならなかった。以上に加えて、ソルトレーク神殿の建築費用、増大する一方の教育および福祉関連費用、各種産業の事業開始資金などが、負債を膨大な金額にふくらませていた。

教会の財政負担が増大する一方で、1880年代から什分の一による収入が減少していた。これは連邦政府が現金を押収してしまうため、会員たちは積極的に献金する気持ちになれなかったためである。さらに教会に対して憎しみを抱く人々が、教会員は什分の一を強制的に払わされているといううさを文書や談話を通じて国中に広めた。これがきっかけとなって、什分の一の領収書に「選択の自由による献金」というただし書きが印刷されるようになったのである。こうして教会は1890年代に各種金融機関から莫大<sup>ばくだい</sup>な資金を借り入れざるを得ない状態に追い込まれ、年間の利子だけでも10万ドルを支払っていた。「1898年7月現在で、教会は銀行からの融資残が93万5,000ドル（半分以上がユタ州以外の銀行からの借り入れであった）、ソルトレーク・シティ内の企業からの借り入れが10万ドル以上、末日聖徒の個人からの借り入れが20万ドル以上に上っていた。」<sup>9</sup>

ウッドラフ大管長が亡くなる前に150万ドルの融資を受けるために東部の金融業者との交渉に行っていたフランク・J・キャノンが大管長会から呼ばれ交渉経過の説明を求められた。この会合での報告に愕然<sup>がくぜん</sup>としたスノー大管長は、教会の財政問題について引き続き、調査し、考え、祈ることにした。大管長は、教会が多くの純然たる営利事業に資金を投入していることに重大な関心を抱いた。営利事業につぎ込んでいる資金の半分を福音を宣べ伝えるために使っていれば、もっと大きな成果を上げられたはずだという考えに達した。大管長は中央幹部に対して、教会は東部の金融業者からの融資を受けないこと、少なくともしばらくの間は出費を抑える方針を貫くことによって、できるだけ早く赤字から脱却することを通告した。この決定に基づいて、教会はデゼレト電報通信網会社、ユタ製糖会社、ユタ電力・鉄道会社、製塩所および鉱山の株などを手放した。

スノー大管長は、フランク・J・キャノンが交渉してきた150万ドルを借り入れるのではなく、年利6パーセントの6か月短期債券を発行して100万ドルを調達することを承認した。これらの手段を講じたにもかかわらず、1899年春までに、教会財政の複雑な問題を完全に解決できるような答えを見つけることはできなかった。

1899年4月総大会を終えたスノー大管長は、教会の財政問題を解決するために熱心に祈り、主から知恵を受ける必要があると強く感じた。しかし大管長の祈りに対する答えはすぐには与えられなかった。このとき、スノー大管長は他の中央幹部とともにユタ州南部のセントジョージと他の定住地を訪問しなければならないと強く感じていた。ジョセフ・F・スミス副管長を含む少なくとも16人の幹部が夫人とともに訪問することになった。当時ユタ州南部の定住地は厳しい干ばつに見舞われていた。



## 世紀の分岐点に立つ教会

1899年5月17日水曜日、セントジョージ・タバナクルで行われた大会の最初の部会で、スノー大管長は聖徒たちに対して次のように語った。「わたしたちがこの地を訪れているのは主が命じられたからです。しかし、いまだもってわたしたちが来た目的がはっきりしません。けれどもここに滞在している間に知らされるでしょう。」<sup>10</sup>

『デゼレトニュース』(Deseret News)に大会の様態を報告する特派員として同行した、大管長の息子であるリロイ・C・スノーは、そこで起こったことを回想して次のように述べている。「父は説教の途中で突然、絶句してしまいました。会場は水を打ったように静まりかえりました。わたしはそのときの、体全体がぞくとするような興奮を生涯忘れることがないと思います。そして、再び話し始めたときの父の声には張りがあり、神の靈感が父だけでなくすべての聴衆を包んでいると感じました。父の目は爛々<sup>らんらん</sup>と輝き、顔から光が出ているようでした。特別な力に満たされていました。そして、父は自分の前に繰り広げられた示現を、末日聖徒に対して明らかにしました。」<sup>11</sup>

スノー大管長は、聖徒が什分の一の律法をおろそかにしていること、教会員が完全で正直な什分の一を納めるならば教会が負債から解放される姿を目にしたと語った。さらに、聖徒が什分の一の納入をおろそかにしていることを主は怒っておられること、聖徒が什分の一を納めるならば、干ばつが取り去られて豊かな収穫を得ることを主が約束しておられると語った。

スノー大管長は大会終了後再び、教会の財政問題の解決策は什分の一の納入にあるという強い気持ちを覚えた。リーズ、シーダー・シティー、ビーバー、ジュアブ、その他ユタ南部の定住地において、スノー大管長はこの福音の原則について力強く説教した。ユタ中央部のニーフアイでは、スノー大管長は什分の一に関して受けた啓示を述べた後、「出席した全員が、主が大管長に与えられた啓示の特別の証人となるよう任命する」<sup>12</sup>という異例の発表を行った。

教会本部に戻ったスノー大管長は6月の相互発達協会大会において再び、什分の一について力強く述べた。そこでB・H・ロバーツ長老は、今提示された什分の一の教義を受け入れることを提議し、この提議は全会一致で採択された。スノー大管長は明らかに聖霊に満たされた様子で立ち上がり、「ここでこの約束を交わしたすべての人は、日の栄えの王国において救われるでしょう」<sup>13</sup>と宣言した。

すべてのステーキ大会において什分の一が説かれた。そして1年後、スノー大管長は、過去1年間に聖徒はその前の2年間の合計の2倍に相当する什分の一を納めたことを発表した。靈感によって開始されたプログラムはやがて1907年に債務の全額返済という結果をもたらしている。多くの聖徒たちは、教会を救うために天の窓が開かれただけでなく、この神聖な律法に従った人々が霊的にも物質的にも祝福を受けたことを証している。

スノー大管長は、教会資金の支出についてさらに厳しい制限を実施した。大管長は資金のすべての支払いを統制する計画を明らかにした。しかし財務の専門家たちは、什分の一を使用する権限は分散させることが望ましいと提案した。これに対してスノー大管長は、権限を一極に集中させることを意図しているのではなく、ただ主が命じておられるように支出の権限は大管長会にとどめておくべきであると関係者に述べた(教義と聖約120章参照)。



このセントジョージ・タバナクルにおいてスノー大管長は、教会の安定を図る方法として什分の一の納入に関する啓示を受け、什分の一を強調する説教を行った。

タバナクルは1863年6月に定礎式が行われ、1875年に完成した。1876年5月7日ブリガム・ヤング・ジュニアが奉献の祈りをささげた。



一般にはあまり知られていないが、チャールズ・W・ペンローズ（1832 - 1925年）は注目すべき生涯を送っている。18歳のときに英国で改宗し、6か月後に同国での伝道に召された。それから、10年間にわたって英国で伝道を続けた。その間、22歳のときに有名な賛美歌「高き山よ」を作詞している。

家族とともに英国からユタへ移民した後、2度英国への伝道に召された。ユタにおいてペンローズ長老は、積極的に政治に関与し、新聞の執筆・編集を行い、教会歴史記録者補佐を務め、伝道用のパンフレット『生ける光が放つ光線』( *Rays of Living Light* ) を作成するなど教会の書物を数多く執筆した。

1904年チャールズ・W・ペンローズ長老は72歳で十二使徒定員会に召された。その2年後にヨーロッパ伝道部の部長として英国に戻っている。1911年ペンローズ長老はジョセフ・F・スミス大管長の第二副管長に召され、1921年にはヒーパー・J・グラント大管長の第一副管長に召されている。

スノー大管長は教会の大管長に支持されてから3か月後に、『デゼレトニュース』を再び教会の管理下に取り戻した。デゼレトニュース社は1892年からジョージ・Q・キャノンと彼の息子たちが教会から借り受け、新聞を発行していた。スノー大管長は、長年にわたって宣教師として働き、また新聞事業に豊かな経験を持つチャールズ・W・ペンローズを編集長として召した。こうして『デゼレトニュース』は再び教会の公式な情報伝達手段としての機能を果たすようになった。ペンローズ兄弟は、数年後に十二使徒定員会に召され、さらにその後大管長会の一員に召されている。

### 最初の女性宣教師の召し

1898年、中央青年女子相互発達協会管理会が中央青年男子相互発達協会の管理会を招いて開かれたレセプションにおいて、伝道事業における新しい方針が発表された。これら二つの組織の指導者に向けた話の中で、キャノン副管長は次のように発表した。「賢く分別のある女性数名を伝道地に召すことが決定されました。」<sup>14</sup> 過去にはルイーザ・バーンズ・ブラット姉妹、キャロライン・クロスビー姉妹などが、宣教師として働く夫に同行したことはあったが、教会は姉妹を主イエス・キリストの使節として正式に召し、任命したことはなかった。

大管長会の決定を促したのはエリザベス・クラリッジ・マッキューンである。1897年から1898年にかけての冬の間、家族とともにヨーロッパ旅行に出かけるに当たって、マッキューン姉妹は祝福をしてもらうためにロレンゾ・スノー大管長を訪れた。スノー大管長は祝福の中で次のように言った。「あなたは天使のように清らかな心で福音の原則を説くことができるでしょう。」海外で多くの人々と福音について話し合ったときにこの祝福は文字どおりに成就した。このため、マッキューン姉妹は遠からず若い女性たちが伝道に召されるであろうと自分の娘に話している。<sup>15</sup> マッキューン姉妹は旅行から戻ると、ヨーロッパ中で人々に福音の原則を説いたときの経験をスノー大管長に話した。さらに、彼女が話したことがきっかけとなって、英国の親戚の何人かが教会に改宗したことも報告した。キャノン副管長が大管長会を代表して先の発表を行ったのはこの後間もなくのことである。

「末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師として正式に任命された最初の姉妹は、カリフォルニア伝道部の部長E・H・ナイの妻、ハリエット・マリア・ホースプール・ナイであった。彼女は1898年3月27日、十二使徒のブリガム・ヤング・ジュニアによりサンフランシスコにおいて任命された。

この直後に、プロボ第4ワードのジョセフ・B・キラー監督より、ワードの二人の若い女性をヨーロッパの伝道に召す件について、ステーク会長会に問い合わせがあった。」その結果、ルーシー・ジェーン・プリムホールとアイネズ・ナイトが英国伝道部に専任宣教師として召された。<sup>16</sup> 二人の姉妹はそれぞれ十分な教育を受け、才能に恵まれた教員であり、福音の原則に関する知識も十分に身に付けていた。

姉妹宣教師が任地に到着し、伝道活動を始めると、『ヤング・ウーマンズ・ジャーナル』( *Young Woman's Journal* ) は二人の伝道活動に関する記事や二人から寄せられた手紙を数回にわたって掲載した。ジョージ・Q・キャノン副管長までもが「女性の宣教師」( "Women as Missionaries" ) と題して、二人の働きを称賛する手紙を引用した記事を『ジュブナイル・インストラクター』( *Juvenile Instructor* ) に掲載し

## 世紀の分岐点に立つ教会



9人の子供を持つエリザベス・マッキューン（1852 - 1924年）は、長年にわたり扶助協会と中央青年女子相互発達協会管理会で働いた。またユタ系図協会の会長、神殿の儀式執行者、テンブルスクウェアの宣教師としても奉仕している。女性の権利を主張する運動にも活発に活動し、ロンドンとローマで開催された国際婦人大会に参加している。

た。この記事は後に『ミレニアルスター』（*Millennial Star*）<sup>17</sup>にも掲載されている。これらの姉妹宣教師は、戸別訪問によるちらし配り、街頭伝道、大勢の群衆を集めて集会を開くなどして熱心に伝道活動に従事した。モルモンに敵対する英国の新聞に中傷記事が掲載されることもあったが、魅力的であるばかりか知的なモルモン女性が力強く伝道する姿は、英国人の目を引くところとなった。

新聞に掲載された二人の手紙には次のように記されている。「わたしたちは街頭集会も数多く開いています。これまでのところ、何の妨害もなく、人々は熱心に聞いてくれます。多くの人々から家庭に招かれてユタやユタの人々、そして福音についてお話ししています。プリストルにはもうすでに何人かの親しい友人ができました。」<sup>18</sup> 伝道部内に姉妹が赴任してきたという情報は、二人の姉妹が出席することになった初めての伝道部の神権会が「宣教師集会」と改称されたことが示すように、伝道部内全域に知れ渡っていた。<sup>19</sup>

時には失礼なことを言われることもあったと手紙に記されているが、それらも姉妹たちにとっては貴重な経験となった。しかし、ほとんどの手紙には、長老たちからの手紙と同様に成功もあれば落胆もある宣教師の日常的な生活の様子が記されている。1899年1月、プリストルでモルモン反対グループが結成され、宣教師の活動を妨害し始めた。<sup>20</sup> 英国の他の地域でも回復された福音を宣べ伝える青年男女の活動を妨害する動きが見られるようになっていた。ナイト姉妹は手紙で次のように報告している。「いつも順風満帆ということはありません。暴漢に追われて交番に逃げ込んだり、侮辱する言葉を暴徒から浴びせられたり、敵対者からつばを吐きかけられたり、石を投げつけられたり、棒を振り上げられたりもします。けれどもわたしたちは喜んで御業に携わっています。」<sup>21</sup> こうしてアイネズ・ナイト姉妹とルーシー・ブリムホール姉妹は全世界の伝道部で雄々しく福音を宣言する大勢の女性の先駆けとなったのである。

1890年から1900年までの10年間に、宣教師数が倍増したという事実から、教会の伝道活動に対する熱意をうかがい知ることができる。その後も伝道部の数と宣教師の数は着実に増え続けていった。

ルーシー・ジェーン・ブリムホールとアマンダ・アイネズ・ナイトは独身女性として最初に宣教師に召された姉妹である。二人は1898年4月1日、英国で働く召しを受けた。

ブリムホール姉妹は1895年にブリガム・ヤング・アカデミーを卒業後、教員をしていた。ナイト姉妹とは仲の良い友達だった。アイネズ・ナイト姉妹はジェシ・ナイトの娘であり、また初期の教会歴史で有名なニューエル・ナイト、リディア・ナイトの孫娘であった。二人はヨーロッパ旅行を計画していたが、伝道に召されたため中止した。





### 20世紀への突入

世界中の人々が20世紀に新しい時代の到来を待ち望んだように、教会員も期待に胸をふくらませていた。スノー大管長は「全世界へのあいさつ文」(*Greeting to the World*)と題した宣言を作成して、教会はどのような世界を築こうとしているのかを明確にした。大管長は20世紀が「平和と偉大な進歩の時代となり、全世界で黄金律を実践する時代となるであろう。……恐ろしい戦争は過去の遺物にしなければならない。各国は相互に尊重し、あらゆる国が成長することを目指すべきである。一民族の繁栄や帝国の拡大ではなく、人類全体の福祉を研究しなければならない。世の専制者と国家の支配者よ、目を覚まして、来るべき平和と幸福と繁栄から放射される光が20世紀の朝を金色に染めていることに目を留めよ。……軍を解体せよ。戦争を想定した武器の製造ではなく産業の振興に力を注げ。人民の首からくびきを外せ」との希望を述べた。そして、神と御子と聖なる天使が人に語りかけられたこと、神は全人類に対して悔い改めて神のもとへ来るように招いておられることを証した。さらに、87歳になるスノー大管長は全世界の人々に天の祝福が降り、平和がもたらされるように願い求めて宣言を終えた。<sup>22</sup>

新しい年と新しい世紀を迎えるに当たり、1900年12月31日午後11時より、タバナクルにおいて特別礼拝が行われた。あの有名なパイプオルガンに電光文字で「歓迎、1901年、ユタ」と装飾を施したタバナクルには5,000人の聖徒が集まった。ソルトレークステーク会長アンガス・キャノンの司会によって進められた集会は敬虔な雰囲気包まれていた。多くの聴衆は教会がこれまでに成し遂げてきた成長と業績に思いをはせ、また大胆に20世紀に立ち向かう教会の姿を思い浮かべていたに違いない。1900年末現在で、教会は43のステーク、20の伝道部そしてステークと伝道部に967のワードと支部を擁していた。28万3,765人の会員はほとんどが西部の山間地域に住んでいた。セントジョージ、マンタイ、ローガン、ソルトレーク・シティーの4つの神殿で儀式が執行されていた。1900年には796人の宣教師が、世界の国々で福音を宣べ伝えるために任命されていた。<sup>23</sup>

宣教師に召される人数が増えてきたことに伴い、教会指導者は宣教師に十分な訓練を施す必要があると感じていた。このため1900年に、七十人第一評議会は教会教育部と協力して、プロボのブリガム・ヤング・アカデミー、ソルトレーク・シティーのLDS大学、ローガンのブリガム・ヤング・カレッジ、アリゾナ州サッチャーのLDSアカデミーにおいて宣教師訓練コースを開設することを決定した。ここで、宣教師候補者は6か月の教科課程で神学と宗教史を学び、聖文に基づく教え方の訓練を受けた。受講料は無料で、参加者の滞在費はステーク会長が負担することになっていた。

教会員は毎週日曜日の午後、2時間の聖餐会に出席していた。通常は安息日の午前中に開かれる日曜学校の後に、断食証会が毎月1回開かれていた。冬の間は青年男女の集いが週日、おおむね木曜日の夕べに開かれていた。扶助協会は火曜日の日中に、初等協会は水曜日の放課後に開かれていた。神権定員会は月曜日の夕べか日曜日の朝に開かれていた。しかし、ほとんどの教会員が農作業で忙しい夏の間は神権定員会は開かれなかった。



## 世紀の分岐点に立つ教会

### 地域宣教師訓練センター

| 場所                | 開設      |
|-------------------|---------|
| ブラジル, サンパウロ       | 1977.11 |
| ユタ州プロボ            | 1978.10 |
| ニュージーランド, ハミルトン   | 1978.11 |
| メキシコ, メキシコ・シティー   | 1979.1  |
| 日本, 東京            | 1979.5  |
| チリ, サンチアゴ         | 1981.7  |
| フィリピン, マニラ        | 1983.10 |
| 英国, ロンドン          | 1985.2  |
| 韓国, ソウル           | 1985.4  |
| アルゼンチン, ブエノスアイレス  | 1986.2  |
| グアテマラ, グアテマラ・シティー | 1986.5  |
| ペルー, リマ           | 1986.7  |
| トンガ               | 1987.4  |
| サモア               | 1987.9  |

1892年から年に1回、ステーク神権指導者の管理の下でワード大会が開かれるようになった。この大会で会員は指導者を支持する機会と、神権指導者から指導と霊的な励ましを受ける特権に浴した。多くのワードでは日曜学校の主催による野外プログラムを実施していた。会員たちはまず午前中に、用意したプログラムの発表会を行い、午後には子供たちのパーティーを開き、夜はダンスを踊った。また、毎年春になると各ワードでは年輩者のためのパーティーを催した。最大の呼び物は、華やかに装飾を施したホールで行う大晩餐会であった。

20世紀に入ってから、教会の若い女性のための正式な定期刊行物として『ヤング・ウーマンズ・ジャーナル』が登場した。この機関誌には、ヘンリー・ワーズワース・ロングフェローのふるさと紹介、真理についての証を得る方法、少女が知っておくべき倫理などの記事のほか、使徒パウロの紹介、ヒーバー・J・グラントの回顧録なども掲載された。これらは、若い女性が福音に対する理解を深めるだけでなく、世界中の優れた文学に触れることを目的として、女性指導者が執筆した。また、若い女性はこの機関誌から、キルト作り、裁縫、ボタン穴かがりなどを学ぶこともできた。

1900年1月から『ジュブナイル・インストラクター』は、対象とする読者を全教会員に広げて、「わたしたちの指導者 使徒の生涯」(“Lives of Our Leaders - The Apostles”)と題する記事の連載を始め、教会の中央幹部の略歴を毎回エッセイ風に採り上げた。また、短編小説や「国々の歴史」(“History of the Nations”)というタイトルでアラスカ、ベルギー、アイルランドなどを紹介する記事もあった。ステークでは日曜学校大会が年に1度開かれた。この大会では中央管理会会員や中央幹部による報告や指導が行われたほか、子供たちのコーラスの発表、教授法改善のための現職教師訓練などが行われた。ステークの規模は大きく、例えばユタステークには49の日曜学校が組織され、1万1,000人の聖徒が登録されていた。

『コントリビューター』(Contributor)に代わって出版されることになった青年男子相互発達協会の機関誌『インプルーブメント・エラ』(Improvement Era)は、『モルモン書』の翻訳に関する記事、中央幹部の説教、他の教会の聖職者や反モルモン作家の攻撃に対する反論などを掲載していた。青年男女の組織は年次大会を開催して、数千名の青年を集めていた。この大会では、中央幹部による指導、ダンス、演劇のほかに、翌年度のプログラムの紹介などが行われた。

20世紀を迎える時点で、ユタは州に昇格し、教会は財政の安定を取り戻し、ほとんどの地域の聖徒はもはや暴徒から家を追い出される恐れを抱く必要もなかった。彼らは砂漠に花を咲かせた。そして、末日に関する預言の成就を待ち望んだ。

## 十二使徒の責任の明確化

20世紀の幕開けとともに、西部山間地域における開拓者時代が終わりを告げていることがいっそう明白になってきたため、スノー大管長は全世界に出て行って福音を伝える必要性を強く感じていた。これを実施する責任は十二使徒定員会にあった。十二使徒会はスノー大管長の指示を受けて、伝道活動を展開する新しい地域の検討に入った。

1901年、ジョージ・Q・キャノン副管長は大管長会を代表して、日本に伝道部を開

## 時満ちる時代の教会歴史

設すると発表した。この発表を聞いていたヒーバー・J・グラント長老は非常に強い印象を受けた。それは、グラント長老自らが伝道部を管理するために召されることを告げる声が聞こえたと思われるほどのはっきりとしたものだった。25分後にキャノン副管長はグラント長老が選ばれて日本へ行くことを発表した。グラント長老は多額の負債を抱えており、借金の返済に追われてとても伝道に行けるような状態ではなかったが、それを言い訳にせず召しに従って行こうと決意していた。大管長会はグラント長老に1年間の猶予期間を与え、その間に私的な事柄を整理し、また伝道の準備をするように言った。

ヒーバーの財政状態と彼がどれほどの犠牲を強いられていたかをよく知っていたジョン・W・テラー長老は次のように預言している。「あなたは主の恵みにより、十分な金銭を手に入れて、経済的な束縛を解かれ自由になって日本へ行くでしょう。」グラント長老は直ちに家へ帰り、自分の経済的な問題を解決できるよう主に助けを求めて祈った。グラント長老の証によると、神の靈感により幾つかの巧みな手段が与えられて、またほかにも数々の祝福が与えられて、4か月で負債を完済することができた。<sup>24</sup> グラント長老は日本へ赴く同僚として、北部諸州伝道部の部長であったルイス・A・ケルチ、29歳のホラス・S・エンサイン、18歳のアルマ・O・テラーを召した。一行は開拓者記念日に当たる1901年7月24日にソルトレーク・シティをたち、荒れ狂う太平洋を渡って8月12日に横浜港に到着した。

宣教師たちは横浜市に到着するとすぐさま行動を開始した。教会出版物の翻訳と出版をとりあえず手配し、長期的に住むことのできる家を探し始めた。ところが、一行が来日する情報をつかんだ他のキリスト教宗派の牧師たちは、教会に関する偽りの情報に惑わされていたため、日本に末日聖徒イエス・キリスト教会を定着させまいとして猛烈な敵対行為を展開した。

しかし、福音を宣べ伝えるという宣教師たちの決意はいささかも鈍ることがなかった。1901年9月21日、彼らは横浜市郊外の人里離れた森を見つけ、ひざまずいて、グラント長老が奉獻の祈りをささげた。グラント長老の舌は緩められ、御霊が力強くグラント長老を覆った。あまりにも強い力であったため、彼は後に、神の天使たちが近くにいた思いがしたと語っている。

グラント長老はまた、『『偉大にしてかつ進歩国家である日本へのごあいさつ』を書いた。これは『モルモン』の宣教師がなぜ日本を訪れたかを簡単明瞭に説明したものであった。

『.....私どもは皆様方が信じておられる真理やこれまで受けてこられた啓蒙の光を奪おうとして参ったのではなく、より偉大なる光、より豊かな真理、そしてより進んだ知識を携えて参りました。.....

私どもは神の権能によって、日本国民の皆様のために聖なる鍵によって天の王国の扉を開きました。』」グラント長老は最後に「キリストのために働く僕」<sup>25</sup>と記して署名した。

グラント長老は日本中を旅行した後、他のキリスト教宗派からの偽りと憎しみのこもった攻撃に対抗するため、東京で最も有力な新聞であった『ジャパンメール』(Japan Mail)に連載記事を掲載し始めた。

グラント長老は2年間滞在してユタに戻ったが、他の宣教師は残った。テラー長



ヒーバー・J・グラント(1856-1945年)は23歳でトゥエラステークの会長に召された。2年後、26歳の誕生日を迎える直前に十二使徒定員会の一員に召された。それから19年後に日本において伝道活動を開始するために派遣された。

この写真は日本を奉獻した場所で撮影したものである。左から、ホラス・エンサイン、ルイス・A・ケルチ、ヒーバー・J・グラント。

## 世紀の分岐点に立つ教会

老は9年間滞在し、その間に『モルモン書』を日本語に翻訳した。日本政府は1890年代に国内に浸透しつつあった西欧化の風潮を阻止するために「日本人のための日本」という政策を打ち出していた。このため、末日聖徒をはじめキリスト教各宗派の伝道はほとんど成功していなかった。日本伝道部が最終的に閉鎖されたのは1924年のことである。後に日本における伝道活動は大きな成功を収めるが、それは1945年以降、第二次世界大戦終結後まで待たなければならない。

1901年にグラント長老が日本へたつた後、大管長会と十二使徒定員会は南アメリカ、オーストリア帝国、ロシアに福音を伝えることを検討し始めた。中央アメリカにおける伝道の第一歩は、1901年に行われたメキシコにおける伝道の再開であった。アンモン・M・テニー長老がメキシコの幾つかの支部を再建することに成功した。しかし、この時期に同国では政治的な問題が続発したため、これ以上の進展はなかった。

この世における最後の数か月となった1901年の夏から初秋にかけて、スノー大管長は御霊の励ましと現実とのギャップに頭を悩ませていた。スノー大管長は、大管長会と十二使徒定員会の評議会において、主イエス・キリストの再臨までに地の国々に福音を宣べ伝える義務は使徒と七十人にあることをしばしば口にしていた。使徒と七十人の7人の会長が、本来地元の神権指導者がなすべき責任を果たしていたために、非常に多くの時間を取られていることを大管長は憂いていた。また、数週間悪質な風邪を引き、せきが止まらない状態が続いていたが、スノー大管長は10月の総大会でこの重要な件について説教をしたいと考えていた。

預言者は健康状態が優れなかったため大会の部会をすべて欠席していた。しかし1901年10月6日の日曜日の最後の部会で話すため、病気を押してタバナクルに姿を現した。そして公の席での最後の説教を行った。ジョセフ・F・スミス副管長は1か月後に次のように述べている。「大管長は明らかに弱っていました。しかし、大管長の思いがこの上なく清らかであり、大管長の口をついて出た言葉は力と自由がみなぎ

1901年に印刷された、ヒーバー・J・グラントによる「末日聖徒イエス・キリスト教会に関する声明」(“An Announcement Concerning the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints”)と題した最初の日本伝道用ちらし。日本語版は1903年に印刷されている。

ヒーバー・J・グラントの名刺。左上に教会名が印刷されている。

